## ご近所探検隊

夫婦で自然観察指導員になって８年が経過しました。

もともと二人の趣味が登山だったので、山歩きをしている時に見かける植物や昆虫のことがわかるともっと楽しいだろうな、ということがきっかけでした。はじめは自分自身が自然観察会で案内することなど考えてもみなかった（今でも自分が教えてもらいたいくらい）なので、正直とまどいばかりでしたが先輩の指導員方のおかげで何度か東葛しぜん観察会の案内をさせていただきました。

とはいえ、まだあまり参加する時間も自信もなく、ふだんはあまり東葛しぜん観察会の指導員として積極的には活動していないのですが、同じ所属内で指導員として活躍していらっしゃる鈴木さんご夫婦が個人で催していらっしゃる月一回の観察会に興味を持ち、時々参加しています。

ご夫妻は我孫子市にある根戸森のフィールドを中心に観察会をされていて、たまたま自宅が近いのもあり、私たち夫婦も時々参加させていただいています。

毎月参加しているわけではありませんが、そこでは四季折々に顔を出す植物や昆虫達を観察することができます。毎回、根戸の森周辺に住んでいらっしゃる自然が大好きなご近所の方々が寄り集まり、どこに何が咲いていたとか今年はどこにどんな野鳥が来ていたなど、情報交換の場にもなっています。

**柿の葉で作ったお人形**

そこで気づいたことは、こんな身近な場所におどろくほど多様な生物たちが生息していることでした。

今まではそれほど気にしてなかった田んぼのあぜ道、車の行き交う道路脇の草むら、貯水池などこんなところにこんな面白い生き物がいる、ということに気づくことができ、近所にいながらまるで探検隊の気分になれます。

何より一番近場の情報なのでいつでも見にいけるのがいいと思いました。

**アカボシゴマダラの幼虫**
**（うまく擬態しています）**

東葛しぜん自然観察会で行う観察会は毎月それぞれ違う場所、違うリーダーが担当して案内をされるので、それも楽しいのですが、根戸森の観察会ではほぼ毎回同じ場所なので、四季を通じて定点観察できるという違うメリットがあり、それも魅力的に感じました。

毎回、会に参加していてもすっかり忘れてしまっていた知識もあり、同じ季節に同じ感動を味わうという楽しいボケもありますが、去年のこの季節にここにあの植物があったのに今年は見当たらないとか、

以前は広い湿地だったのに、いつのまにか太陽光発電パネルが設置されていたりして目まぐるしく環境が変化しており、多様性を維持していくことが今後ますます難しくなるのかな、と肌で感じることもあります。少し残念な気持ちになることもありますが、生き物たちのたくましい生活ぶりを見て自然ってホントにすごいな、と感動させられる今日この頃です。

遠藤鏡子（柏市）

**冬支度をするコゲラ**

## この頃気になる植物

この頃気になる植物を書き綴ってみようと思う。

秋が深まってくると、少し人里離れているところや、山道に入ったところによくあったアキノキリンソウをつくづく見なくなったと思う。また、数年前にはよくみたのにこの頃ではゲンノショウコの花が少なくなったなと思っている。「お、ゲンノショウコ。」と、ときたまみつけると嬉しくなってしまう。草花遊びを子供たちに紹介するとき、イヤリング、ノーズリングの遊びを加えることができるようになるからである。よく同じ仲間であるアメリカフウロが、ゲンノショウコを隅に追いやったのではといわれているが、そのアメリカフウロもひと頃の勢いはなくなってきたのかなとも思うが、どうだろうか。

さて、この頃コニシキソウは少なくなってきたのではと思っている。

少し前までは、道端、畑や空き地の地面に這っているのはコニシキソウと決まっていた感がある。在来種のニシキソウはないのかと思ってさがしてみたことがあったが、みな葉に黒点のあるコニシキソウであったという記憶がある。ところがこの頃はよくニシキソウを見かけることがある。これは私の眼が肥えたからかもしれないが、とにかくニシキソウと同じ仲間であるオオニシキソウはよく見かける。ニシキソウは、オオニシキソウを小型にした姿で、つまりコニシキソウと同じくらいの大きさだが、コニシキソウより少し斜めに立った姿で眼に飛び込んでくる。なるほど、葉はコニシキソウと同じくらいか少し大きめ、葉に黒点はないし、毛も少なそうである。

それよりもこの頃目につくのは、ハイニシキソウとアレチニシキソウ？である。ハイニシキソウはコニシキソウかなと思ってよく見たら、黒い点が葉にはないし、葉は小さいままである。これが私の家の近くのコンビニの道端に何個かあり、そこ中心に道端に広がっているようである。またアレチニシキソウ？（「２０１０年版県植物ハンドブック」には記載はない）が、私の住んでいる地区のモノレール駅近くの銀行の駐車場に何個か生育している。また前述のコンビニ近くのの道端にも１個見つけている。アレチニシキソウ？は、ニシキソウのように斜めに茎が立っているが、枝分かれが多く、まるでこんもりした座布団のように広がっている。そしてハイニシキソウの葉と同じように黒点はなく、小型である。スマホでニシキソウ属を調べてみたら、コバノニシキソウという種もあるようである。これは、茎はハイニシキソウのように地を這うが、節のところで根を出す種のようである。ただこれはまだ見たことはない。コニシキソウ、ハイニシキソウ、アレチニシキソウ？ニシキソウ、オオニシキソウとみな 1 年草である。このうちハイニシキソウは今きれいに紅葉している。来年は、ハイニシキソウ、アレチニシキソウ？はさらに広がりをみせるだろうと予想している。

さてトウダイグサ科ニシキソウ属に近い植物にコミカンソウ科コミカンソウ属がある。その中のヒナコミカンソウはみたことはなく、コミカンソウも数回みただけである。ただしコミカンソウだと思ってよくみたら、ミカンの柄が長い種がある。調べてみるとナガエコミカンソウ（別名ブラジルコミカンソウ）だそうである。これは結構よくみることができる。

つい最近の観察会で、このミカンが枝の付け根に数個かたまってつくコミカンソウをみつけた。葉腋にはほとんどついてはいない。このミカンはコミカンソウと同じで、ぶつぶつがあり、ほとんど柄はない。このコミカンソウは、何なんだろう。来年の花が咲くころから注目したいと思っている。（尾澤）

ハイニシキソウ

アレチニシキソウ？

謎のコミカンソウ

## ムラサキシキブとコムラサキ

秋の里山での自然観察会では色々な木の実が見られます。
紫色の小さな実をつけるムラサキシキブは目立つので「あれは何ですか？」と尋ねられる事があります。
「ムラサキシキブ」と答えると「我が家のムラサキシキブとはずいぶん様子が違う」と言われます。
「それは・・」と言いかけると脇から「庭に植えるのは園芸種だから、実が沢山なるのです」とご親切な方が割り込んで答える事が何度もありました。問いかけた人は「あーそうですか」と納得の様子です。
野山に自生しているムラサキシキブを選抜、交配などの改良により、あのように実付きが良くなったと理解されたようです。しかし、それは正しくありません。

図鑑の解説によれば、通常庭に植えられるものは近縁種のコムラサキ（別名コシキブ）とあります。
野生のコムラサキは湿地の林縁などでまれに見られ、分布は本州から沖縄まで広範囲のようですが、私自身は県内外を問わず、これが自生のコムラサキというものを見たことがありません。
園芸店で売られている苗木からしてムラサキシキブの名札が付いているので混乱が生じるのも当然です。

（↑ムラサキシキブ　　↓コムラサキ）

双方とも実の色、粒の大きさに大差ありませんが、枝ぶりと樹高が違います。
山野にコムラサキの自生は見かけなくても、我が家では植えた覚えの無いコムラサキが数本有って、毎年実をつけています。小鳥が種を落としていったからでしょう。
メジロとジョウビタキがあたかも自分達のご先祖が蒔いた木の実だから当然の権利とでも言わんばかりの様子で啄みます。住人は部屋に逃げ込んでカーテンの隙間から食事風景をウォッチングすることになります。庭では小鳥の落とした種から芽生えて生長するのに山野で見かけないのは何故でしょう？不思議です。

佐倉市　　坂本　文雄

## ナニコレ？タチバナモドキの不思議

９月 15 日、東葛しぜん観察会での下見での出来事です。場所は京成国府台駅近くの江戸川河川敷。「枝先に変な花がついている！」みんなで、「何だろう、何だろう？ピラカンサに似ているけど、今どき枝先に八重の花をつけることはないよね。」と、謎めいた花は謎のまま。11 月 10 日に再び行ってみると、橙色の実がたわわについており、タチバナモドキだとわかりました。秋本番なのに、枝先には八重の花が咲いており、花が咲き終わった後には、雌しべのもとが膨らみ赤い実のようなものも見られます。「？・・・」タチバナモドキは、５月に５弁の白い花を咲かせ、秋に橙色の実をつける木です。秋に、違うタイプの花を咲かせ、違うタイプの実をつけるとは何とも不思議です。

タチバナモドキは、中国原産で、バラ科トキワサンザシ属。ミカン科のタチバナに似た実をつけるので、この名がつけられたとのことです。似た仲間に赤い実をつけるトキワサンザシやカンデマリ(ヒマラヤトキワサンザシ)があり、公園や庭によく植栽され、野生化もしています。数種類をまとめてピラカンサあるいはピラカンサスと呼ぶようです。枝先に八重の花をつけるのは、赤い実のなるトキワサンザシでは見かけません。江戸川以外でも、この花が見られるのかどうか気をつけて見てみると、数か所で見られました。ということは、タチバナモドキの秋に枝先につける八重の花は、決して珍しいことでもなさそうです。11 月下旬、まだ花をつけています。

枝先の八重の花

花のあと、赤いむき出しの果実のようなものが出来る？

花床が肥大し果実を包み込む偽果(ナシ状花) 。ガクが残る。

タチバナモドキは葉裏が毛深いのが特徴。枝先がトゲになる。

### ピラカンサの実を食べる鳥

私の散歩コースに真っ赤な実をつけているトキワサンザシがあります。お日様にあたると赤い実が輝き、青空とのコントラストがとても美しいです。こんなに目立つのに、まだ鳥は食べません。私のところでは、年末から年明けくらいにヒヨドリやムクドリに食べられ実はすべてなくなります。未熟な実には毒(青酸化合物)があるのでしょうか。食べ頃を鳥はちゃんとわかっているのですね。少しだけ味見をしてみると、パサパサで少し酸味がありマズイ。鳥が食べる頃にはもう少しおいしくなるのでしょうか。この実を食べる鳥は、他にツグミ、メジロ、カラムクドリを見かけたことがあります。さて、この冬は、どんな鳥が食べにやって来るでしょうか。鳥が食べる頃、また味見をしてみよう。

田島正子(船橋市)

## すがすがしい気持ち

観察会でのことです。鳥、昆虫、植物に詳しく、観察会の対象地周辺を始終観察している生き物ウオッチャーといってもよい方が参加してくれました。

集合場所から出発して、近辺の植物をいくつか説明していると、その方の講釈が始まりました。でも、連れの方に語るようにしゃべっているので、全体の運営には響かない調子でした。「私たちは生き物は好きですが、専門家ではありませんので、あまり期待をしないように」と先輩指導員の方に教えられたように出発前にお話ししていてよかったと思いました。

観察会では主に秋の植物に着目していたこともあり、植物の構造や木の実のなり方などを観察していましたので、その方の不得意分野でもあったのでしょうか？植物の知らない分野には耳を傾けていました。

川辺に出ると「川の向こう壁の穴はカワセミがいる。あっちは行かないのか」、「この前サシバがいた」と、少し言葉数が多くなりました。自分の得意分野だったのでしょう。教えられたことは次回の参考に記録しました。

ヤナギタデの味見、サルトリイバラの葉や実の色、イヌタデのツボミ、花、タネ、実の付き方などを観察しました。小さな花の様子は不得意だったのでしょうか。参加者と一緒に観察を続けていました。

ウオッチャーさんは、この周辺が好きで、近くに車を置いて週に何度も出かけて来るほどだと仰っていました。ゴミがあると気になると小さなバッグからビニール袋を取り出し、川辺に捨て置かれたペットボトルを５～６本拾っていました。「自然が好きならどうして捨てていくんだろ」と言いながら拾う姿に、指導員全員凍り付いたようになりました。拾ったペットボトルは捨てるべきところに捨てていかれたのだと思います。これは見習うべきなのかなと感心しました。

いい人に出会った。すがすがしい気持ちになった観察会でした。

個人的には「サブ講師で・・・」などと思いましたが、実は次の観察会にも参加してくれました。　（松戸市　　藤田　　隆）

コセンダングサ

晩秋の色どり

キンチョーの秋

小坂　裕子

７月配信のメルマガにて「暑くても外が好き」、暑くても子どもたちは外が好きと書きましたが、今年の夏はついに子どもたちに異変が。

いつものように外遊びを誘うと「えーー暑いんだもん。いやだ。」

「お外でお水かけて裸足で」と、楽しい遊びを提案しても、

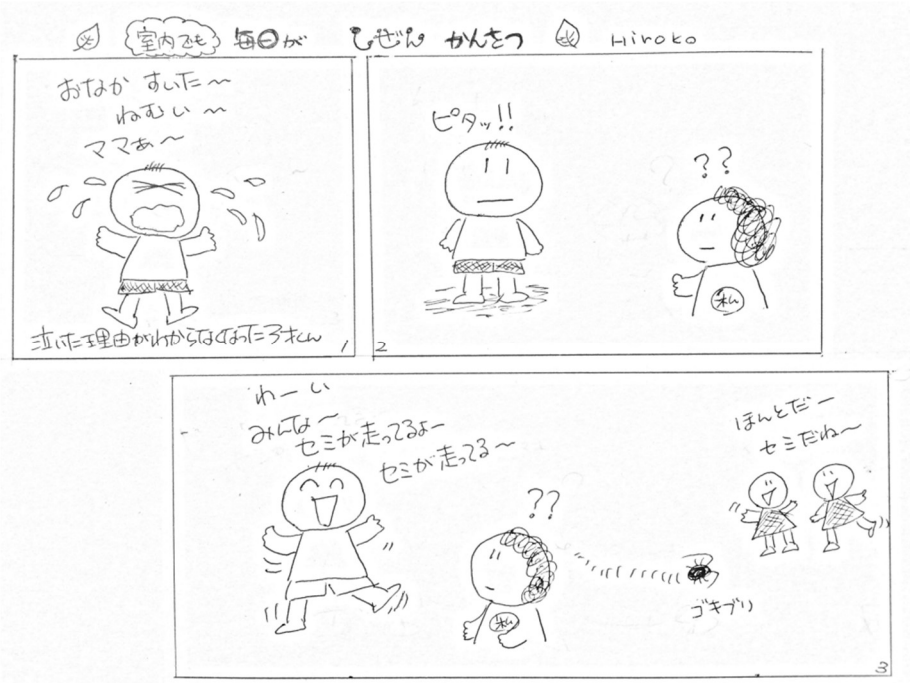
「一人で遊んできてもいいよ、ぼくたち、わたしたちお部屋で遊んでいるからー」と、面倒そうに答える子どもたち。

長年、子どもたちと外で水遊びしたり、夏の遊びを満喫していたのに外遊びを断られたのは初めて。

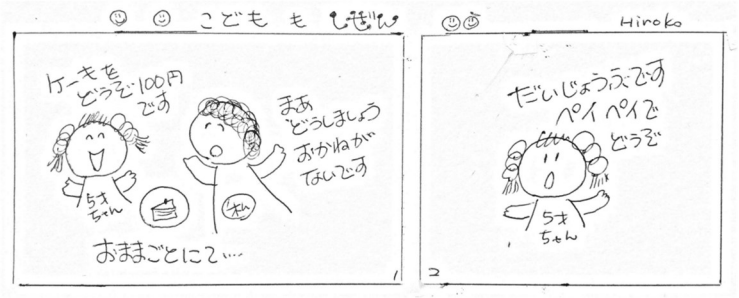
夏と言えば、CM でお馴染みのキンチョーの夏は日本の夏・・・。私が子どものころ、夏は蚊取り線香を窓辺に並べる手伝いや、お盆に農家の親戚の家に泊まりに行くと大きな蚊帳の中で寝るのが楽しかった。思えば、蚊の対策も夏の思い出のひとつだったのに、ここ数年、夏は耐えられない暑さになり蚊の姿は暑さのためか見かけない、蚊取り線香が活躍するのは夏よりも秋へ。

室内で過ごす時間が多くなればその分、自然に触れる時間も少なくなりましたが、この原稿を書いている１１月下旬でも、気温が高く夕方まで外遊びを楽しめています。このまま夏に減った外遊び分を取り返せそう。夕方、カラスたちが鳴きあいながら森の方角に帰る時間になっても、園庭で走り回る子どもたち。外遊びが好きなのは、変わらないのです。

子どもたちは、常に目がキラキラしているわけではない。お友達とケンカをしたり、転んだり擦りむいたり、急にママに会いたくなったり。キラキラとドンヨリを行ったり来たりで忙しい。ドンヨリの時は、キラキラになりそうな誘いをしても難しいときもあるのだが、そんなときに小さな蚊が一匹でも手に止めれば、とたんにキラキラ目になり、手でパチンと叩いて得意そう。ムヒを塗ってフーフーしてもらうのも夏(秋)の思い出になります。




☆ゴキブリを初めてみたと、思われる三才君。大きさやシルエットがたしかにアブラゼミに似ています。




☆ペイペイのこと。

世の中の動きに素早く順応できるのも生きていく戦略なのかな、子どもはすごい！

実際の出来事を漫画にしました

## 植物雑感『ヒイラギ』:柊。 モクセイ科モクセイ属・Osmanthus heterophyllus

冬がやってきました。漢字で木偏に冬と書く「柊」はヒイラギと読みます。最初は何故と思っていましたが、丁度冬になる今頃に花が咲く事を知り、なるほどと理解できました。他には柊の葉にはトゲがあり、触ると痛いので、疼ぐ(ひいらぐ)からの名前ともあります。常緑の小高木で、今頃に花が咲きます。5mm ほどの小さな白い花が葉腋に束生します。花は雌雄異株で雄花では雌しべは小さく結実しませんが、雌株には両性花が咲き、2 本の雄しべと 1 本の雌しべがあります。4 弁花で花弁はそっくり返り、花は良い香りがします。翌年の 6〜7 月に 1.5cm ほどの紫黒色の果実ができます。
葉の縁には鋭い刺がありますが、老木になると刺のない丸い葉になりヒイラギと分からなくなります。

私の住まいの近所には古くからの家もあり、門の近くや玄関脇や生垣にヒイラギを植えてる家があります。家を覗きに来た鬼の眼を突く為とか、邪鬼を追い払う意味があるそうです。別名にはオニノメツキと恐ろしい名前もついています。鬼にとっては、迷惑な話です。
Wikipedia には「ヒイラギは古くから邪鬼の侵入を防ぐと信じられ、庭木に使われてきた。家の庭には表鬼門(北東)にヒイラギ、裏鬼門(南西)にナンテンを植えると良いとされている(鬼門除け)と書いてあります。ナンテンは難を転ずる意味でしょうが、現在は入口が一ヶ所ですので、生垣の混ぜ垣として、両種が一緒に植えられている場所もあります。刈り込んでもすぐ新芽が出て枝葉は密になり、生垣に最適なのと、葉に鋭い刺があるので、泥棒除けになった感じです。
鬼は架空の生き物ですが、昔から目に見えない恐ろしいこと、季節の変わり目に起きがちな病気や飢餓、災害などは鬼の仕業とされ、日本の昔話にもたくさん登場しています。最近では新型コロナウイルスは目に見えない病気と思えば鬼の仕業になりますね。

鬼退治で言えば、節分の夜には鬼払いの“鬼は外と”豆をまく風習がありますが、同じ意味でヒイラギの枝にイワシの頭を挿して門戸に飾って、鬼を退散させる風習があるようです。イワシを使うのは臭さで鬼を寄せつけないように、ヒイラギは刺で目を刺す為です。私は家の近所で、このイワシの頭を挿したヒイラギの枝の景色を見た時には、日本の風習が引き継がれているのに感激しました。

これらは、日本の風習ですが、西欧でも同じような風習からか、クリスマスに英名ホーリーとヤドリギで作った花輪を飾るクリスマスリースがある。ホーリーとはセイヨウヒイラギのことで、刺に魔除けの力を信じている。但し、セイヨウヒイラギはヒイラギとは別のモチノキ科の植物で秋に赤い実がなります。クリスマスリースには常緑の葉は永遠に、赤い実は情熱を表し、葉の刺で邪鬼や悪霊を払うという効能が信じられた為です。ヒイラギの刺にて鬼や悪魔や魔除けに使うのは日本も西洋も同じですね。

小島紀彦(我孫子市)

ヒイラギの葉と花

「柊を幸多かれと飾りけり」 夏目漱石

柊鰯

セイヨウヒイラギ

## 初冬の虫たち

虫たちは木の枝や落ち葉の下などに潜り込み、いろいろな姿で寒い冬を乗り切る。冬の散歩はそんな姿を発見するのが楽しい。落葉樹の枝に変な葉っぱを見つけた。枯葉に擬態しているアカエグリバだ。アカエグリバはアオツヅラフジを食べて大きくなり、成虫越冬で果汁などを食べて春まで命をつなぐ。成虫越冬の虫はタテハチョウの仲間等意外と多く、陽だまりで日向ぼっこをしているのをよく見かける。ヤマグリの枝でウスタビガの空繭に黒い卵を数個見つけた。これは卵で越冬だ。エノキの樹下で、枯れた葉っぱをめくったら、オオムラサキやゴマダラチョウの幼虫を見つけた。可愛い(^▽^)/。12 月に雑木林などで羽化するクロスジフユエダシャク。雄は口がなく、羽のない雌のフェロモンをひたすらひらひらと探して飛びまわる。何も食べられないので寿命はほんの少しなのだろう。無事に雌にめぐり会い、次世代へ命をつなぐ雄はほんの一握り。虫の世界は大変だ。

山下美佐子　（東金市）

## 身近なところで

小さなものが見えづらくなってきたので、拡大して見えるカメラが手放せない。メモ代わりにカメラを持って、庭やベランダで写真を撮る。すぐに整理しないと何を撮ったものか解らなくなることもあるが、別のものも写っていたりして面白い。加曽利貝塚でジョロウグモの網にアズチグモがかかっていたのを撮ったら、実はジョロウグモが劣勢だった。サワフタギ食のフタジマネグロシャチホコ幼虫がいたと喜んで写真を撮って、後で見たらハエトリグモにガブリとされていた。コナラの幹でアブラムシを運ぶアリを撮ったら、アリはピンボケして別の翅有りと翅無しのアブラムシと黄色い卵？が写っていたなど。
先日、ベランダで小さい蛾を見つけたので、写真を撮ったらアミガサハゴロモだった。庭ではアオバやベッコウは見るがアミガサは初めてだった。風で飛ばされてきたのかと喜んでいた。その後の大草調査の際、外来種のアミガサハゴロモがいると聞いたので、もしやと思って写真を送って聞いてみたら、やはり外来種だった。南方系のフタツメオオシロヒメシャクが庭にいたり、キマダラカメムシが窓枠のところで越冬しようとしたりなど、見られる生きものが変化していると感じる。　松本美千代（千葉市）

網戸で孵化したキマダラカメムシ

フタツメオオシロヒメシャク

外来種のアミガサと大草のアミガサ